

春日形厨子の系譜における木村定三コレクションM616《黒漆厨子》

京都国立博物館（名誉館員） 久保 智康

仏像や舍利を安置する厨子は、入母屋造や寄棟造屋根をもつ仏堂形式の宮殿形厨子が時代を通して見られた。その嚆矢はいうまでもなく、法隆寺伝来の玉蟲厨子である。鎌倉時代以降、とくに小型・中型の厨子は、宮殿屋蓋の上面を平板にし、瓦表現も省いた簡略な四注形とする厨子が定型化する。これらは、春日大社、興福寺をはじめとして奈良周辺の寺社に多く作品が伝来することから「春日形厨子（以下、春日厨子という）」と通称され、中世を通じて最も広く見られた。その用途は、仏像のほか、舍利容器、曼荼羅等の仏画などを安置するのに用いられた。

木村定三は、仏像と共にそれを安置する厨子の蒐集も積極的に行い、とくに春日厨子に優品をみる。本稿で述べる《黒漆厨子》（木村定三コレクションM616、カラー口絵1～9参照）は中でも古様な作例で、内壁に絹本著色の千体観音像を貼り込んだ特筆すべき厨子である。木造で、総体に黒漆塗り（ただし現状の漆は後補の塗りか）。高さ80.4cm、屋蓋部で幅66.5cm、奥行51.3cm、軸部で幅56.3cm、奥行40.7cmを測る中型の厨子である。屋蓋は降棟先をわずかに反らせる。欄間は前後面3区、両側面2区を設け、横連子を表して緑色彩色を施す。軸部は、正面を観音開き、両側面を片側開きとする扉を設置し、軸穴で留める。軸部の四本柱は四角を丁寧に面取りする。基壇羽目板の格狭間は、前後面3区、両側面2区を設け縦連子を表して緑色彩色を施し、金銅覆輪をめぐらしている。ゆったりと量感をもつ古様な形ながら、中央が上方へわずかに間延びするのは後出的要素といえる（図1）。軒先・長押・框などに金銅八双金具を、また扉と本体を繋ぐ花先形蝶番金具を打つ。素文で簡素な形状のこれらの金具は、中世前半の調度に通有の外見を示すが、若干の後補品が混じる。また扉中央の花先形金具は、おそらく近世に現状の漆塗りを施した際に補われたものである。

さて本厨子（以下「木村厨子」と記述）は、中世の春日厨子の系譜のうちで、どの辺りに位置づけすることが可能であろうか。一般の春日厨子と異なる大きな特色は、屋蓋に緩やかなむくりをもつことである。その違いは、室町～桃山時代（16世紀）に降る作例であるが、木村コレクションM599《黒漆厨子》（図2）にみる春日厨子の典型的な屋蓋と比較すれば一目瞭然であろう。このようなむくり屋根は、東大寺戒壇院千手堂の本尊千手観音と四天王像を安置する厨子（図3）にみる宝形造の屋蓋形式を引いたものと想定される。千手堂厨子は頂に金銅の火焰宝珠を設え、そこから四隅へ向かって降棟がわずかに立ち上がるが、これらを省き簡略にした形が木村厨子の屋蓋といえよう。千手堂厨子の旧扉には、正面分に二十八部衆と風神雷神、向かって右側面分に俱利伽羅龍剣と不動明王・二童子、同じく左側

面分に四明王が、旧後板には補陀洛浄土図が描かれる。鎌倉時代半ば、文永六年（1269）四月五日、後嵯峨上皇が同日の戒壇院での受戒に先立ち新造の千手堂に立ち寄っており（『春日社記録』中臣祐賢記）、前述の扉絵からみても、厨子が建物と同じくこの時期に造られたとみて差し支えない。なお、これとほぼ同形式の宝形造屋蓋をもつ春日厨子が奈良市円成寺に伝来するが、格狭間の形式崩れが著しく、側面も大きく観音開き扉で開放する構造になることから、南北朝から室町時代初めころまで下降するとみられる。逆にいえば、以下に述べる典型的作例も含めて、春日厨子の各形式は、格狭間など個別部位が経時的变化を示し、あるいは影響を与えて別の形式を生み出しはしても、大枠では長期にわたって踏襲され、併存していくというべきである。

そもそも屋蓋上面を平板にするという春日厨子の形状は、いつ頃に成立したのであろうか。近代に春日若宮社から西大寺を経て根津美術館の所蔵に帰している《大般若経厨子》（図4）は、春日厨子内に大般若経の経箱60口を装架し、観音開き扉内側に寛元元年（1243）の寄進状、屋蓋底板下面に同年および三年の坪付注文の文面を印刻している^{（注2）}。屋蓋上面を平板とする春日厨子の確実な初現例といえよう。これに続く作例としては、奈良市長弓寺本堂の十一面観音立像を安置する《黒漆厨子》（図5）を挙げうる。欄間を正面3区の横連子とし、扉内側に両界曼荼羅を彩色で描く。要所に素文の金銅製八双金具を打ち、豊かに膨らむ格狭間の形やそこに打つ打出しの蓮華形金具（図6）からも、棟木銘より弘安二年（1279）建造と知れる本堂と同時に製作されたと思しい^{（注3）}。奥行を深くとり、屋蓋は広く平板な形をなして、わずかに四隅が反りを見せている。次に奈良市靈山寺本堂の薬師三尊像を安置する《黒漆厨子》（図7）は、天井の桁に弘安八年（1285）八月十五日の朱漆銘を認め、同年の施入とみていい。欄間を正面4区の横連子とし、扉内側に聖徳太子孝養像と僧形（伝行基）像を彩色で描いている。屋蓋は平板を1枚張る薄い作りで、四隅を長久寺厨子に比べわずかに強く反らせる（図8）。

舍利厨子と同様の形制をみせる春日厨子の古作は、奈良市般若寺蔵の《密観宝珠嵌装舍利厨子》（図9）である。慶長大地震で倒壊した建長五年（1253）造立の十三重石塔の軸部から発見されたという「舍利殿」にこれを比定し、製作時期を13世紀半ばとみる見解が河田貞氏により出されたが^{（注4）}、蓮台宝珠を支える三鈷杵の形式はそこまで遡り得ず、14世紀前葉、鎌倉時代末頃まで下降するものと思われる。屋蓋軒先が前述の靈山寺厨子と比べても強く反るのも新様の特色といえよう。

以上にみた千手院と根津美術館・長弓寺・靈山寺・般若寺の厨子の様相から、13世紀半ばから14世紀前葉にかけ、屋蓋を平板とした春日厨子が次々と製作され、その亜形式として宝形造屋蓋をもつ春日厨子も併存したといえることができる。このような状況下で製作されたと思われる興味深い作例が、奈良県大和郡山口市千体寺伝来の《紫檀塗螺鈿厨子》（図10）である。軸部の形制は春日厨子に連なるものではないが、屋蓋はやはりごく薄い四注形で、頂に本来宝珠を載せていたと思しい板状の露盤を設けている。この厨子に年紀はなく、筆者はかつて飾金具などの特色から13世紀後半の製作になると考えた^{（注5）}。千手堂厨子よりもさらに春日

厨子の形式に近い屋蓋の特色からも、この年代観が傍証されるであろう。もっとも内藤榮氏は、基壇羽目板の縁に表される唐草文の様式的検討などから、今少し遡る13世紀前半の製作年代を提示しており^(注6)、その考えに立てば、宝形造の屋蓋が低平化して春日厨子の平板な屋蓋へと変化する途中の姿を千体寺厨子は見せているという理解もできなくはない。今後のさらなる検討を期したい。

以上の検討を踏まえ木村厨子の形姿を改めて眺めると、当初の想定通り、その屋蓋が春日厨子の亜形式になり、千手堂厨子の宝形造屋蓋の諸要素を簡略化したものと結論づけられよう。製作年代は、千手堂厨子が製作されたとみられる文永年間より降り、さらに千手堂厨子・長弓寺厨子の横方向に張った量感たっぷりの格狭間の形に比較して、木村厨子のそれはわずかに縦方向に伸びるという後出性が看取されるので、製作年代は弘安年間よりも下降する鎌倉時代後期から末期あたりに絞り込めるであろう。ただし、形式的に木村厨子のすぐ後に位置づけ、かつ製作年の判明する作例が現時点で見出せないため、厳密には木村厨子の製作年が南北朝時代まで下降する可能性を全く否定することもできない。今後さらに作例の検証が必要である。

最後に、木村厨子内にかつて安置されていたであろう尊像について推論しておきたい。前述の千体寺厨子は、内壁に千体阿弥陀像を設えて、中に阿弥陀三尊像を安置している。このように千体仏は、中尊に合わせて行われた多数作善によるもので、鎌倉時代以降に流行を見た。したがって木村厨子内には、内壁画に描く千仏観音と同様に左手に未敷蓮華を持し、これに右手を添える姿の木造聖観音菩薩立像が奉安されていた可能性が高い。具体的には、比叡山延暦寺の横川中堂本尊系譜を引く観音像(図11)^(注7)のごとき像容が想定される。すなわち木村厨子は、中世前半に遡る春日厨子の一形式を示し、かつ観音への多数作善の信仰の在り様を今に伝える優品ということができるのである。

本稿を執筆するにあたり、関連作品である長弓寺・霊山寺の黒漆厨子を調査させていただいた。両寺の御高配に深甚の謝意を表します。

注

- (1) 岡崎譲治他『仏具大事典』鎌倉新書 1982年。
- (2) 国際仏教学大学院大学日本古写経研究所編『根津美術館蔵「春日若宮大般若経および厨子」調査報告書』2018年
- (3) 長弓寺薬師院住職岡崎良昭師の御教示によると、本厨子は昭和10年の本堂解体修理(報告書未刊行)の際に屋根裏から見出された旧厨子で、それまで用いられていた宮殿形厨子(江戸時代の製作、薬師院に現存)に替って須弥壇上に戻されたという。
- (4) 河田貞「密観宝珠嵌装舍利厨子」(作品解説)『仏舎利の荘厳』奈良国立博物館 1983年
- (5) 久保智康「紫檀塗螺鈿厨子」(作品解説)『金色のかざり—金属工芸にみる日本美—』京都国立博物館 2003年。
- (6) 内藤榮「千体寺紫檀塗螺鈿厨子について(上)」『奈良国立博物館研究紀要 鹿園雑集』6号奈良国立博物館 2004年
- (7) 井上一稔「日野山信仰と仏像」『文化財からみる越前市の歴史文化図鑑』越前市教育委員会 2016年



図1 《黒漆厨子》(愛知県美術館木村定三コレクション M616) 格狭間



図2 《黒漆厨子》(愛知県美術館木村定三コレクション M599)



図3 《黒漆厨子》 東大寺千手堂
(注1 文献より転載)



図4 《黒漆大般若経厨子》 根津美術館
(注2 文献より転載)



図5 《黒漆厨子》 長弓寺
(奈良県教育委員会HPより転載)



図6 《黒漆厨子》 格狭間・蓮華形金具 長弓寺



図7 《黒漆厨子》 霊山寺



図8 《黒漆厨子》 屋蓋部側面 霊山寺



図9 《密観宝珠嵌装舍利厨子》 般若寺
(注4 文献より転載)



図10 《紫檀塗螺鈿厨子》 千体寺
(注5 文献より転載)



図11 《聖観音菩薩立像》
福井・荒谷二ノ宮神社
(注7 文献より転載)

《黒漆厨子》（木村定三コレクション M616）修理後全体画像

元興寺文化財研究所撮影



1



2



3



4



5



6



7



8



9